
言の葉の魔術師

萩原和輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言の葉の魔術師

【Nコード】

N2828M

【作者名】

萩原和輝

【あらすじ】

才能を開花させれば大きな力になる

魔術はこの世界で広まった特殊な分野であり、全てと言ってもいい程の代物だった。

言の葉のアリア。

世界屈指の天才魔術師であり、名称魔術といったオリジナルの魔術を使用する。

そして、彼女に出会い、同行するようになった優樹。
彼もまた魔術師である。

そんな「偶然出会った魔術師2人」の物語。

言の葉の魔術師（前書き）

あれっすね。

魔術です。

やっぱり厨二です。

男はやっぱりかっこいい物が好きなのです。

というわけでよろしくお願いします。

言の葉の魔術師

全ての名称には力がある

アリアに会った時、そう聞かされた。

『言の葉のアリア』。

彼女が使える魔術は、一般の人が使える魔術の量と効果を遙かに凌ぎ、数は700を超える。

事は1週間程前に遡る

旅をしていた見上優樹^{みかみゆうき}は、とある町で偶然にも彼女と出会った。

高位魔術師であるアリアに出会えたとなって、無謀にも模擬戦を挑んでしまった。

本当に無茶なことをしてしまったと後悔している彼がいる。

でも、その時は勝てると思っていたのだ。

だって……見た目が同じ年くらいの女の子だったんだから。

「なあ」

「なあに、負け犬優樹」

「……」

ちくしょー。

まさか自分より小さい女の子（一応同じ年）に負け犬呼ばわりされるなんて……

「この『付き人』っていつまで続けられればいいんだ？」

「私が飽きるまで」

優樹は、ただの奴隷じゃないか……と思いつつも重たい足を進め続ける。

前を歩くアリアは、小さいというか小柄な体格をしていた。そんな彼女を見てみると、負けたのがとても不思議に感じてしまう。それ以上に、今は『普通の女の子』にしか見えないのだ。

「まあ、俺は特に目的地はないからいんだけどさ……」

「そう、ありがとう。やっぱり1人は心細いのよね」

アリアは素直に感謝の言葉を伝えてくる。

笑顔を見せる彼女は、本当に心の底から感謝しているのだろう。

「でも女じゃなくてよかったのか？ 男の俺じゃあ何かと不安だろう？」

「んー？もしかして私を襲う気なのかしら？」

アリアは不敵な笑みを浮かべながら顔を近づけてくる。

一瞬、身を引きそうになった優樹だが、変なプライドがそのままの体勢を維持させた。

「いやいや、女の方が宿に泊まる時とか変な気を遣わなくてすむだろう？」

「優樹、さつきから何言ってるの？」

「え？」

「男とか女とか関係ないよ。優樹が強いから選んだだけ」

アリアはそれだけ言うともた足を動かし始めた。

「俺、負けたんだけど」

「でも、本気出してなかったでしょ？それに私なんか魔術以外の能力は一般人以下なんだから」

「……」

戦闘中にすぐ気付いたけど、アリアは魔術以外普通の女の子だった。戦闘のセンスもあるわけではなく、ただ魔術を相手にぶつけるだけ。一応魔術で身体能力を上げることができる様だが……

「よく、一人で旅してきたよな」

「うん。やっぱり寂しかったよ」

そっち？

危険性の方を心配したんだけど。

「優樹、下がって」

アリアの声が急に緊張した声変わる。

「!？」

アリアが淡い桃色の円を前方に発生させ、向かってきた白色の槍を受け止めた。

「槍!？」

槍の向かってきた先を見ると、白いスーツの男が立っていた。

無名の魔術師（前書き）

戦闘シーンです。

厨二です。

厨二全開です。

あと解説や魔術の説明等を別で短編に執筆しましたのでそちらもご覧下さい。

よろしくお願いします。

無名の魔術師

白いスーツの男は既に前面へ陣を展開させていた。

「誰？」

「『ルート』のハウリー・チャイルドと申します。以後、お見知りおきを」

丁寧な言葉とは裏腹に、彼の陣はいつでも魔術を発動できる状態にある。

「そう、また性懲りもなく……。優樹も知ってるでしょ？」

「あ、ああ」

彼は歯切れの悪い返事を返す。

そう、優樹は『ルート』のことをよく知っていた。

『ルート』。

魔術師による犯罪組織。

目的は強力な魔術師を集めての戦力強化。

そして『世界』への干渉。

「優樹、どうしたの？」

「いや、何でもない」

「そう……。じゃあ、あいつをやっつけて」

「……は？」

「だから、あいつをボコボコにしちゃってって言うてるの！」

「何で！？お前が戦えばいいじゃん！強いんだろ！？」

「なんのためにあなたを連れて来たと思ってるの？」

「ええ……」

「それにさ、私と戦った時には本気出してなかったでしょ？」

「……」

無言。

「剣だつて模造刀だったし」

「……」

「またも無言。」

「魔術も使つてなかったし」

「ああもう！わかったよ！やりやあいんだろ！」

模造刀を構え、ホウリーの方へ3歩程進む。

「言の葉ではなくあなたが戦うのですか？」

「成り行きでね」

「そうですか。ではまずあなたの命から頂きましょう」

ホウリーの右手が上がる。それが戦闘開始を告げる合図だった。

ホウリーの手が空中に文字を刻む。

ギリシャ語かラテン語か。

筆記体で書かれた文字は、次第に形を矢へと変化させた。

「私の名はホウリー・チャイルド。形成系の魔術師だ」

ホウリーはその光体の矢を構え、俺に向けて放った。

矢のスピードに魔術の威力。

放たれた矢は、もはや矢の殺傷力を遥かに上回っていた。

優樹は模造刀に魔術を込める。

「零 神刀開放」

模造刀の空間がガラスのように割れ、開放前と然程変わらない片刃のシンプルな真剣が姿を現した。

「白の十字架」

続いて魔術の詠唱。

優樹の目の前に十字架が現れる。

「っ！防御結界だと!?!」

白色の十字架を中心に広がる防壁はハウリーの光矢を完全に防いでいた。

「何だ、けっこう軽いな。お前本当にルートの一員か？」

「このっ……、ガキがつ！図に乗るなああああああ！」

ハウリーは杖を投げ捨て、両手で前面に陣を敷く。

もはや辺り一帯を破壊するのではないかと思うほどの術式だった。巨大な陣が広がる中、優樹は剣を構える。

「遅い！」

優樹は剣でその巨大な陣を切り刻んだ。

「な!?!」

「……………」

「魔術の『発動』への直接攻撃……。貴様、あの空席の……………」

「やっと気付いたか、新入り野郎」

あくまで冷静に。

俺はハウリーの魔術の要である両腕を潰した。

2人の魔術師

腕を潰されたホウリーはその場に崩れ落ちた。

「今まで見つからずに済んでたつてのに……」

優樹は両刃の剣を模造刀へと戻し、アリアの方へと振り返った。

「すごい……」

「？」

「すごいよ優樹！」

「何が!？」

「だって瞬殺だよ!瞬殺!」

「そこまで早くねえよ!」

「まさにフルボッコ!ギタンギタンのメタンメタン!」

「お前急にどうしたんだ!？」

少しアリアの頭が心配になってきた。

いや、天才の頭つてのはこういうものなのだろうか。

「これ、防御結界だよね？」

アリアは俺の発動した白色の十字架を見る。

「まあそんなとこ。これは俺のオリジナルだな」

「基本格子は形成系の魔術……、それに概念付加か……」

既に分析を始めている。

本当にこいつは『天才』なんだろう。

「っと、それよりここを離れよう。奴らに場所がばれてる」

ホウリーと戦闘があつた場所から数十キロ離れた。

辺りの風景は海原が目立ち、綺麗な夕日が海面を照らしていた。

「アリア」

「ん？」

歩きながら優樹は訊ねる。

「聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「うん？」

大方想像はつくが、アリアがルートに狙われている理由を確かめたかった。

「お前、ずっと狙われてるのか？」

「うん、まあね」

アリアは少し寂しそうに下を向く。

「最初は勧誘だったよ。『あなたの力を役立ててみませんか』みたいな。断ったら実力行使に出てきたね、やっぱり」

アリアはずっと一人で戦っていたのだろうか。

そしてルートはこんな女の子を半殺しにしても連れて行くことしている。

「アリア、俺も言っておきたいことがあるんだ」

「？」

優樹は足を止め、数歩先に進んだアリアは後ろへ振り返る。

「俺は元『ルート』のメンバーだ」

「えっ!?!」

アリアは一瞬表情を変えたが、すぐにいつもの顔つきに戻った。

「でも、『元』ってことは……」

「ああ俺はルートを抜けたよ。もちろん俺にも追手はある。アリアの追手より数段上の実力の奴らだ」

「優樹も……」

「で、だ。アリアはこのまま俺と一緒にいていいのか？いままで以上に追手が厳しくなるぞ？」

「それは遠回しに『お別れ』って言ってるの？」

そう。

幸い、まだ幹部クラスは動いていない。

もし幹部の奴らにアリアと俺が一緒だと知られたら、組織の第一目標が俺達へと変わる。

状況を悪くしないためにも、ここで離れた方が賢明だろう。

「……その方がお前のためだ。すぐに騎士団のボディガードでも付ける。それくらいの地位は持つてるんだろ？」

「やだ」

「……」

「やだ」

「……あの、アリアさん？」

「やだ」

何で呼びかけに否定？

しかも笑顔で。

顔は笑ってるけど恐らく怒ってる。だって右手が震えてるんですもの。

「私はもう優樹を付き人にしたの。変えるつもりなんてないよ」

「もし襲われても助けきれない保障はないぞ？特に幹部クラスが現れたらかなり厳しい」

「それでもいい」

アリアは最初から決めてたかのように淡々と話す。

そこまで俺に固執する理由が分からない。

騎士団にでも駆け込めば保護してもらえらるだろうし、ボディガードだって付けれるだろう。

「なんでそこまで……」

「言ったでしょ？『優樹だから』って」

「？」

「アリアがいいなら俺はいいが……」

どうせ一度は捨てた命だ。

だれかのためになるならそれでいいだろう。

「優樹は優しいんだね」

「ばか、俺は元犯罪者だ」

そう言つとアリアはちょこちょこ前を歩いて行く。

「うっん、優樹は優しいの」

アリアは優樹に届かない声で呟いた。

「だってあたしを……、『言の葉の魔術師』なんて呼ばれてるあたしを普通に1人の人間として接してくれたから」

星空の町 1

星空の町 ファルミル。

その名の通り、夜空が綺麗で有名な町。

町の北部から見る広大な星空は流星を見るような感覚を与えてくれる。

はずだった。

俺達はこの町に着いた瞬間に違和感を感じ取っていた。

「おい、何かおかしくないか？」

「まあ明らかに変よね」

辺りを見渡す。

なのに人が見当たらない。

只今の時刻は午後8時過ぎで、夜空を眺めるのにも絶好の時間。それよりもまだ人の活動時間内であつてもいいはずだ。

「建物には電気が着いてるし、ゴーストタウンってわけでもなさそうだな」

「まあいいでしょ。それより宿でも探そうよ」

エリアにそう言われ、違和感を拭いきれないまま宿に向かう。

「はい、2名様ですかあ？」

「あ、はい。お願いします」

宿に着くとアリアがカウンターで手続きを始める。

「この町に今来るって事はお客さんも事件の真相でも調べに来たんですか？……ってそんなわけないか。」

あははははは

「……事件？」

愛想のいい笑いを振りまく従業員は手続きを始める。

「えっ！？知らないんですか？連続殺人事件」

「殺人事件！？」

「そうなんですよ。2週間前からこの町で殺人が起き始めたんです」

「連続……ってことは」

「はい、まだ続いてますね。犯人不明。目的不明。ただ犯人は魔術師の線が強いそうですね」

「そ、それにしちゃあ警戒してないな……」

「いえ、襲われるっていつても屋外だけみたいなんで。まあそれでも町の活気はとてつもなく下がりましたね」

店員はその後に窓を見ながら、「夜空はこんなに綺麗なのに……」と呟いた。

「なんかがっかりねー」

アリアはベッドでうつ伏せになりながら愚痴をこぼしていた。

「しかたないさ。でも確かにもつたいないよな、こんない町なの
に」

優樹は部屋の窓から星空を眺めながら答える。
外を見ると、やはり人影は見当たらなかった。

優樹は視線を窓からアリアの方に向ける。
そこには眠そうな顔をしているアリア。

「ところで、聞きたいことがあるんだが……」

「なあに？」

眠そうな声で返事をするアリアに優樹は言った。

「何で俺とお前が同じ部屋なんだよ!？」

「えっ?んー……、節約？」

「嘘だ!!お前は節約なんかする奴じゃない!!」

アリアは受付で普通に手続きした。

一部屋を。

「しかもベッド一つしかないじゃないか!?!」

「期待してるからね」

「何を!?!」

襲えというのか。

「あたし、寝ちゃつと余程のことがないと起きないんだ」

「いらねえよそんな情報!?!」

「もう、つまんないなあ優樹は」

アリアはくすつと笑いながら体を起こす。
無防備過ぎる。

といつか普通の女の子過ぎる。

「よく今まで無事だったな」

「ん?」

「いや、なんでもないよ」

聞こえないように言ったつもりが聞こえてしまったらしい。

「で、明日は町ん中見て回るのか?」

「それもいいけど、図書館に行ってみたいんだ。けっこう大きい図

「書館みたいだから」

「この町の図書館は無駄に書物が多いらしく、有名な学者とかがよく利用するほどらしい。」

「魔術関連の書物も例外ではなく、全体の2割以上を占めるほどになっている。」

「調べ物か？」

「そんなところかなー。けっこうな冊数を読むかも」

「そっか。じゃあ今日の疲れをとるように早く寝とけ」

「襲うの？」

「ちげーよ!?!」

話が戻った。

「寝るにしても一緒に入らないと」

「お前計ったな!？」

「部屋を何度眺めてもベッドは一つ。
確信犯過ぎる。」

「お、俺はここでいいよ。単なる付き人だしな」

「そう言って窓のそばの壁に背中を預ける。」

「やっぱり断られた……」

当たり前だ。

「お休み」

俺がそう言っと、アリアは諦めたのか布団に潜った。

「……」

少し右を向き、窓の外を眺める。

見直しても、変わらず人の気がない。

星空の町に起きた連続殺人事件。

町に入った時から違和感が途切れなかった。

「殺人鬼……か」

「ホソ、と照れ隠しの咳払いをしてから、

「……何で俺の隣で寝てる？」

「寂しかったから」

「……」

寂しいのは誰にも寝てもらえないベッドの方ではないだろうか。

「今何時だ？」

「んー……、ぐう……」

寝起きのアリアは役に立たなそうだ。

ベッド下に転がり落ちていた置き時計を見ると、午前7時を回ったところだった。

「まあ妥当な時間か」

頭を掻きながら洗面台に向かう。

俺達は外出の準備を整え（アリアを完全に起こすためにかかった所要時間は47分）、町の図書館に向かった。

「何か見つかったか？」

「んー、微妙」

俺とアリアは半日以上図書館に閉じ籠っている。

只今の時刻は午後7時半過ぎ。

片っ端から魔術関連の本を持ってきて、アリアがそれを読む。ただそれだけの作業を延々と続けていた。

アリアは、本全部に目を通すわけではなく目次を最初に見ていたの
で調べたいものは決まっていたようだ。

「何か探し物だったのか？」

「うん、まあそんなところかな。新しく魔術を作ろうかと思って」

「……やっぱりすごいなお前」

「そうかな？やることは簡単だよ」

生活レベルは一般人以下だが。

「んーーーーー！調べ物していると時間が立つのを忘れちゃうねー」

アリアは手を上げて伸びをしながら窓の方を見る。

外を見ると日はすっかり沈んでおり、建物の明かりが見えるだけになっ
ていた。

「今日はそろそろ帰るか。腹も減ったし」

「そうだね。一応何冊か借りて帰ろうかな」

アリアはぱたぱたと少し駆け足気味になりながら受付に本を持って
いく。

受付で本の貸出手続きが終わった後、エントランスにある自販機でジュースを買って図書館を後にした。

「やっぱり星がきれい」

「ああ、この町は星空あってこそだしな」

2人で星空を見ながら帰路についていた。

アリアは、まるで今日の疲労がないかのように少し弾み気味に歩く。それほど綺麗な星空。

でも。

それでも違和感は拭えない。

「やっぱり人が少ない、っていうか見当たらないね」

辺りを見渡してみても建物の明かりが見えるだけで人影は全くと言っていいほど見当たらない。

「例の殺人事件の影響だろうな」

街がここまでの状態になったことは、かなりの頻度で殺人事件が起きるんだろう。

ビルの壁にも張り紙が張っており、「夜間は外出しないようにしましょう」と書いてある。

「ここまで問題が発展してるのに何も対策してないのか？」

「警察の人が見回りはしてるみたいだけど明らかに対策不足だよな。」

武装した十数人で見回りか、騎士団を派遣するくらいは必要でしょ」

「だよな」

いくらなんでも無防備過ぎる。

相手はもう何人も殺している殺戮者だ。普通なら強攻策で捕獲する段階のはず。

「何かおかしいんだよなー」

「？」

アリアは首を傾げてこちらを覗くように見る。

「いや、何でもない」

「変な優樹。あたしたちも遅くなっちゃったから事件に巻き込まれる前に帰る」

「ああ」

そうだな、と頷いた瞬間だった。

突き刺さるような殺気が背中に襲い掛かる。

「!？」

振り向くと同時に刃物が喉元に迫っていた。

「優樹!？」

刃物と刃物がぶつかり合う金属音が街路に響く。
間一髪、優樹は自分の刀で相手の刃物を受けていた。

「っ、まさか……」

優樹は相手を強く睨み付ける。

「お前が殺人事件の犯人か？」

「……」

相手は優樹の問いに答えない。

見た目も大きい黒い布を頭から被っており、性別すら判断できなかった。

ただ、その手に握られている西洋剣と殺気で敵意があることだけはわかる。

「だんまりか……」

「……」

後方ではアリアも魔術を発動し戦闘態勢に入る。

「ついでだ。この町の事件ってやつを解決してやる」

優樹は一度距離を取り直し、再び相手に向かって飛び込む。

右斜め上から振り下ろされる優樹の渾身の一撃に対し相手は受け止める動作だけを見せた。

「っ！」

殺人鬼は優樹の刀を受け止めた瞬間に陣を形成する。

「魔術師!？」

陣の位置は相手の頭上。

大きさは1メートル弱。

「っ！」

小さく舌打ちをする。

相手を魔術師ではないと思いついで無策で突っ込んだ自分のミス。

この魔術の発動タイミングが掴めていない今、術式破壊をするため更に前へ踏み込むのは高いリスクが伴ってしまう。

「零」

防御のために『白の十字架』を展開しようとした時だった。

「優樹、下がって!!」

アリアの声が聞こえて瞬時に後ろへ跳び退く。

「ラースの矢」

「！」

アリアの手から激しい雷炎の矢が放たれ、爆発音とともに粉塵と熱風が辺りに広がった。

ミサイル。爆弾。そんな爆発物を射出するような魔術ではなく、爆発そのものを目標へ飛ばすような魔術。まさに対軍系魔術とも言える代物だ。

相手の体が残っているか心配になるほどの一撃だったが、前を見ると粉塵の中心に動く人影が見える。

「あれをくらって生きてるのかよ……」

少し呆れてた感じで優樹は呟く。

「同系の魔術で相殺されたみたいだね。でも、威力はこっちの方が上だったみたい」

煙がはれた場所に立っていた殺人鬼は黒い布をほとんど焼き尽くされ、完全に姿が見える状態になっていた。

「おいおい……。何で……」

殺人鬼を見て驚愕する。

詳しく言うと腰に提げている剣の鞘の方。その鞘に装飾してあった模様だ。

「騎士団のエンブレム……」

アリアはそう呟いた。

「自警団がなんで……。っ！？待て！！」

殺人鬼は踵を返すように瞬時に街路へ後退していく。

「優樹！」

アリアに呼び止められ殺人鬼を追う足を止める。

「っ!？」

「周りに人が集まり始めた。こっちも引こつ」

「っと……、そつだな」

辺りを見渡すと、遠くに少なからず人影が見えていた。

「ちよつと威力強すぎたかな？」

「ちよつとじゃない……」

アリアと優樹はそのまま帰路についた。

「騎士団、か。どうも怪しくなってきたな……」

星空の町 2 (後書き)

戦闘描写難しい……

まあそれは置いときまして、次回に新キャラ出そうと思います。

よろしく願います。

星空の町 3 (前書き)

すいません、とても遅くなりました。

一応新キャラ登場です。

星空の町 3

深夜。

星空の町に入る人影が一つ。

彼の手にある銃が月光で鈍い光を放っていた。

「僕が助ける……」

彼は強い意志を込め、銃の引き金に指をかける。

「シフト」

引き金を引く。

すると前面に魔法陣が展開された。

「このまま前方に3キロ……」

探知系の魔術で目標を見つける。

「っ……」

人影は目標に向かって走り出す。

強く銃を握りしめ、例の『殺人犯』に向かって。

優樹とアリアはホテルの一室に戻っていた。
部屋に備え付けてあるパソコンを起動させる。

殺人犯との一戦の後、相手の所持していた西洋剣が気になったためだ。

騎士団のエンブレムが付いていた、ということは騎士団の剣で間違いないということ。

騎士団は国家直属の自警団で、基本的には『戦闘に特化した警察』と同義。

そんな組織の剣を、何故殺人犯は所持し、使っていたのか。
ネットで調べるとすぐに答えは出た。

「なるほどね」

「これって……」

やっぱり、というアリア。

それもそのはず。

騎士団を調べるとすぐに先刻の殺人犯の顔が出てきたのだ。

『リアルド・サード』、騎士団長。

「どこかで見たことあると思ったら……」

「騎士団の1人が殺人犯だったのか？」

「……」

結果だけ見ると、騎士団を束ねる彼が殺人犯ということになる。

「何で自警団の長が人殺しなんか……」

お前らは助ける側だろうが、と優樹は続ける。

「なんか怪しい……」

「まあな。さっきの戦闘で分かったけど、人の意識みたいなのが感じられなかったし」

「何か裏があるかもしれない」

裏。

漠然として分からないけど、単なる騎士団長による殺人事件としては考えにくい。

「優樹」

不意にアリアは呟く。

「私達が止めよう」と。

「いいのか？目立つとルートに見つかるかもしれない」

「構わないし、関係ないよ」

すっぱりと言い放つアリア。

「優樹こそいいの？」

「何を今更」

「ありがとう、1人じゃどうしようもなさそうだったから」

アリアは直ぐに探知を開始する。

発動した探知魔術は、残留魔力と逃げた方向から現在地を割り出すものだ。

円が部屋の壁に映し出され、線と点で模様が描かれていく。

「さっきの戦闘場所から西に2キロあたり」

アリアは20秒程で相手を補足する。

「了解。ささと終わらせて飯でも食べようぜ」

「うん」

優樹とアリアは再び暗闇の街の中へと飛び出した。

「団長」

街の裏通りに潜んでいた殺人鬼の目の前に青年が現れる。

右手には銃。

先刻、街に侵入した青年である。

地毛と思われる金色の髪が夜の闇の中でもはっきりと見える。

「シフト」

青年は銃を構える。

一方、殺人鬼は体を青年に向けるだけで、言葉には少しも反応しない。

そのかわり剣に手をかけ戦闘態勢に入った。

「止めさせてもらいます。これ以上、こんな辛そうな団長なんて見てられません」

青年は銃口を地面に向け引き金を引いた。

陣が展開される。

召喚魔術。

地面に描かれた魔法陣から西洋剣が現れる。

騎士団専用の西洋剣だ。

「本気でいきます」

銃と剣を構えた青年は殺人鬼へ向かって駆け出した。

星空の町 4 (前書き)

戦闘です。

いつも通り厨二です。

星空の町 4

金属音が夜の闇に鳴り響き、殺人鬼と青年の影が何度も交差していた。

呼吸すらままならない戦闘の中、青年は額に汗を滲ませていた。

「っ……」

殺人鬼は剣術戦を主としている。

青年は、剣を交えるたびに殺人鬼の『人としての機能』に違和感を感じていた。

「意識はやっぱりないんですね」

そう、殺人鬼には意識がなかった。

つまり、この事件は『無意識下の人間』に置けるものになる。

青年は剣を振り、大きく間合いを取る。

「シフト」

そして、銃に装填されていた魔術を入れ替えた。

彼の持つ銃は魔術発動用。

あらかじめカートリッジに魔術を取り込んでおくことで簡易的に魔術を発動できる。

それに加え、カートリッジを入れ替える（『シフト』がキーワード）ことで、手持ちの数だけ多くの魔術を使用できる。

「『^{アイレイス}氷烈弾』」

青年は引き金を引く。

発砲音とともに陣が展開され、風を纏った氷の弾丸が発射された。
殺人鬼は剣を振るう。

風を斬る音が聞こえ、氷弾は簡単に切り刻まれた。

「まだだ」

引き金を引く。

陣が4つ5つと数を増していく。

「『^{アレイクス}氷烈弾』！」

ドン、と最初の爆発音が聞こえた後、地鳴りのような音とともに無数の氷弾が殺人鬼に着弾していく。

「シフト」

魔術を入れ替え、引き金を引く。

「『銀の震雷』」

陣から発せられるのは横殴りのイカヅチ。

攻撃の手を緩めることなく、第2撃も粉塵の中の殺人鬼に直撃した。

「……………」

全ての魔術が着弾したが青年は構えを解かない。

この程度で団長を押さえられないと知っているからだ。
そして数秒と待たずに噴煙の中から碧色の光が見えた。

「……………？」

煙が晴れていく。

「^{フル}月を刈る者!？」

着弾箇所にはいた殺人鬼は、濃い青色の光を右手に纏っていた。

「そんなっ……、その状態で発動できるわけが」

殺人鬼はそのまま攻撃に転じていた。

この瞬間、青年は『殺人鬼状態の団長は魔術を使用できない』と思
い込んでいたために、剣術戦以外の攻撃に対して無防備状態になる。
殺人鬼が右手を振るうとともに、青色の光が青年へと牙を向けた。

一閃。

青色の光は青年を貫いた。

「っ、が……はっ」

口から鮮血が飛び散る。

ガードに使用した西洋剣は青色の光によって切断されていた。

「く……。シ……。フト、『メギルス』」

彼は再び引き金を引く。

発動する魔術は照射系の光熱魔術。

レーザーを思わせる光線は、一直線に殺人鬼へと伸びる。

「……」

だが、殺人鬼の腕が振るわれ、青色の光が無を言わず光線を打ち消した。

「っ！」

これが騎士団長。

国家最強レベルの戦闘型魔術師。

「さ……すが……団長」

青い光が直撃した腹部からの出血で意識が霞み始める。

「く……」

その隙に距離を縮めない殺人鬼ではない。

瞬時に近づいた殺人鬼は青年の左脇腹に膝蹴りをぶち込んだ。

「があああああつ……！！！！」

軽く3メートル程吹っ飛び、コンクリートの地面に横たわる。

「かはっ……」

口から血が飛び散る。

虚ろな目に映るのは迫ってくる殺人鬼だった。

起き上がるつにも体は言うことをきかない。

「っ……、すみません……僕はあなたをとめられなかったっ」

振るわれる剣。

青年が死を覚悟した時だった。

「ギイイイン！！！！」と一際大きい金属音が響く。

「っ！？」

この金属音は他でもない、殺人鬼の剣を止める音だった。

「だ、れだ……？」

青年の目には、殺人鬼の剣を刀で受け止める若い男が映っていた。

星空の町 4 (後書き)

まだ謎が多いですけどだんだん明かしていきます。

青年の名前は次回。

視点も優樹とアリアに戻ります。

よろしく願いますー！。

星空の町 5 (前書き)

厨二です。

星空の町 5

剣を受け止めた優樹は即座に刀を真剣へと変化させる。

「アリア、倒れてる奴を頼む」

「りょーかい」

アリアは横たわる青年の傍に駆け寄り怪我の様子を見る。

「さて、俺はこいつの相手か」

殺人鬼は間をおくことなく優樹に襲いかかっていた。

一瞬の間に幾度も剣が交わる。

「早いな。だが」

相手の攻撃は相当な疾さで繰り出されていた。息をつく間もないとはこのことか。

剣を絶え間なく振るう敵は途轍もなく脅威に見える。しかし、相手の攻撃には致命的な弱点があった。

「どうもおかしいと思ったんだ……」

優樹は相手の剣を捌きながら気付く。

ずっと感じていた違和感。

そして粗い戦闘方法。

「こいつ、意識がないじゃないか」

騎士団長の暴走。

それをとめようとする者。

それだけで事情が大体読めてくる。

「……………逃げてください」

声を辿ると倒れていた青年が起き上がっていた。

「団長は『月を刈る者』という魔術の代償で暴走しています……………」

「暴走？つと話に耳を傾けてる場合じゃないか」

「があああああああああ！！！！」

殺人鬼が優樹に剣を振り下ろす。

「どいてろ！！」

優樹は剣を振るい、攻撃魔術を発動した。

「カウンス白の剣」

ドン！！と爆発音が広がった。

白光の斬撃が殺人鬼に直撃し、そのまま相手ごと近くのビルに激突した。

「おい、あんまり長くもたないぞ？俺も団長さんも」

「あと5分待って」

「キツイ……」

相手は仮にも騎士団長だぞ……

「ねえ、止められるあてはある？」

アリアは青年に問う。

「何を言ってるんですか！？逃げてくださって言うてるでしょ？！」

青年は立ち上がり銃を構える。

「私が止めます」

「いや、無理でしょ。腹から血出てるよ？」

アリアが青年にざっくり言う。
それ以前に立っているのもやっこのようだ。

「ぐ……」

「とうかどうして1人なの？騎士団全員で来ればいいと思っただけど」

アリアの言う通りだ。

こんな大規模の事件、若い団員1人には荷が重過ぎる。

「実は先日からルートとの大規模な戦闘が続いて……」

「人員不足ってわけか」

そもそも騎士団は精鋭の集まりになっていて人数はあまり多くはない。

「一応こちらにも他に3人の団員が配属されていたんですが……、全員病院送りになってます」

「……」

マジで？

「術式抹消系の魔術を使えば……」

「術式抹消……か」

確かに、術式を無効化できれば魔術そのものはもちろん、魔術の代償や負荷もすべて消し去ることができる。

しかし、その術式抹消魔術の発動が難しいのだ。

発動エネルギーに、詠唱時間、発動タイミングなど、様々な条件が発生する。

「確か騎士団でも上位陣十数名による儀式でやっと発動できる代物でしょ？」

「はい、しかもその魔術の発動元も団長なんで……」

「じゃああたしが発動する」

「は？」

アリアが地面に指を置く。

「あたしなら術式を形成できる」

陣がアリアの足元に広がる。

「だから、あなたが空に陣を打ち上げて」

「あ……」

青年が持つ銃の先にも陣が形成される。

アリアは青年に、陣の中央へ行くように促す。

「で、俺はまたこいつの足止めか……」

優樹は瓦礫から這い出てくる殺人鬼を見てウンザリする。

「足止めじゃ足りないよ」

「え？」

「相手の動きを止めてもらえるかな？」

「む、無茶言っな！自分の命を維持するだけで精一杯だわ！」

「優樹、おねがい……」

「……」

おい、そんな目で俺を見ないでくれよ。
何でそんなに弱々しく言うんだ。

「しかたない……。そのかわり、今日の夕飯は高級牛肉を所望する」

「りょーかい。好きなだけご馳走してあげるっ」

「よし、その言葉覚えとけよ？」

刀を握る手に力を込め、殺人鬼と対峙する。

「じゃあ、さっさと目を覚ましてもらっぞ殺人鬼」

優樹は白の十字架を2つ自分の周りに展開し停滞させる。

「があああああああああああああああああ！！」

「本当の近接戦闘ってヤツを教えてやる！」

大きな金属音と共に再び戦闘が開始された。

「さて、あたしは術式を練らないとね」

アリアは足元に展開されている陣の形を変化させる。

「あたし流、術式抹消魔術。多人数必要な発動元を夜空に浮かぶ星
で代用」

アリアにはエネルギーや魔力の問題は関係ない。

ただ、術式の構成を作り上げる。
それだけで充分なのだ。

「あとはあなたが銃でこの魔法陣を打ち上げるだけ」

「アルフです。アルフレッド・シルフ」

青年は呟くように言う。

彼の名だ。

「そ……。アルフ、銃を構えて」

「はい！」

アルフは星空に向かって銃を突き立てる。

「優樹っ！」

「まかせろ！」

激しい剣撃戦の中、優樹は展開させている白の十字架を4つに増や
す。

「白の剣！」

優樹が放つ強力な斬撃魔術。

しかし、殺人鬼は『月を刈る者』で受け止める。

「まだまだ……」

「団長……」

約15秒の照射が終わる。

殺人鬼は消え、そこには騎士団長が横たわっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2828m/>

言の葉の魔術師

2011年11月16日13時23分発行